

音順	方劑名	生薬構成 および製法・服用方法
	傷寒論・金匱要略条文	読み および解説・その他
かー18	甘草湯 (千金方)	<p>甘草 (甘平) 2g 上の1味を水 120ml を以って煮て 60ml となし、滓を去り 1日3回に服用する。</p>
<p>弁少陰病脈証併治第十一第 31 条 (傷寒論)</p>		
<p>「少陰病 2、3 日、咽痛する者は甘草湯を与う可し。瘥えざれば桔梗湯を与う。」</p>		
<p>解説 少陰病で 2、3 日して咽が痛む者は、甘草湯を与えてやるべきである。もし甘草湯を服して治らなければ桔梗湯を与えてやればよい。</p>		
<p>少陰病で下痢のない初期 (少陰病に罹って 2、3 日経って) に咽痛が出る場合は、熱邪が少陰経脈にあるため、まだ病が軽く浅くまだ潰瘍になっていないもので、咽痛、咳、また痛みなどの時の頓服薬として、甘草湯を用いて清熱解毒、緩急止痛すればよい。この場合の咽頭は、軽い発赤腫脹、舌紅がみられる。甘草湯を服用しても咽候腫痛が治らないものには桔梗湯を用いて熱結を散じ、喉痺を開いてやればよい。</p>		
<p>甘草湯証 咽痛と咳を目標に用いる。また痛みなどの時の頓服薬としても用いる。頭痛、発熱などの表熱があるときは用いない。</p>		
<p>桔梗湯証 咽痛、咳、痰などを目標に用いる。多くの場合、ゾクゾクと悪寒する。しかし体温計での熱は無い。また咽候がいがらっぽく、口が渇くことがあっても水は欲しがらない。</p>		
<p>甘草は、味は甘で、性は寒で、甘で緩急止痛し、寒で除熱解毒する。桔梗は開痺散結して、咽候を利す。</p>		
<p>「方劑決定のコツ」の注釈</p>		
<p>甘草は、粘膜などの炎症による痛みによく、桔梗は、鬱熱があつてそのために痛みを發するものによいので、桔梗湯の痛みは、甘草湯の痛みより少し深く強い。</p>		
<p>甘草湯は、肺痿の虚に用い、桔梗湯は、肺癰の実に用いるのである。</p>		
<p>参考 喉痺とは、咽候腫痛病の総称をいい、多くは発病、および病気の進行は急ではなく、咽候の腫脹発赤疼痛も軽く、軽度の嚥下困難を現わし、或いは声が低く出にくくなる。外感内傷どちらによっても起こり、外感風熱によるものが多く、内傷は陰虚によるものが多い。</p>		
<p>手少陰心経は、心中に起こり小腸に通じ、支脈は咽頭を挟み、足少陰腎経は足より上行し、腎より横隔膜を貫いて、肺に入り舌の根元を挟む。</p>		
<p>甘草湯証</p>		
<p>新古方薬囊によれば「咽の痛む者、咳が多く出でて咽のいがらっぽい者、甘草湯の治し得る咽痛は、熱なく元氣なく但臥している者の咽痛に宜し、若し頭痛、発熱などありて咽痛む者は、麻黄・桂枝等の行く所なり。但し本方の場合にても稀には熱多きものあり、或いは熱高く咽痛み咳出て相当に激證と見らるるものもあり、よく陽證の有無 (頭痛) を調べて用ふれば驚く程効くものなり、咳劇しく出でて止まぬ者に本方にてケロリとすることあり、腹痛の応急に用いて効あり。」と記されている。</p>		
<p>肺痿肺癰咳嗽上気病脈証併治第七第 16 条 (金匱要略)</p>		
<p>「千金甘草湯 千金に曰く、肺痿涎唾多く出血して心中温温液液を治す。」</p>		
<p>解説 千金の甘草湯 千金に云っている肺痿の病で、よだれやつばが多く、出血して胸の中がムカムカとして、口の中に痰や唾液が多いものを治す。</p>		
<p>温温 (オンオン) の場合は熱煩する様子、温温 (ウンウン) の場合は鬱塞せる様子をいう、液液は涎唾の流出する様子をいう。</p>		
<p>「方劑決定のコツ」の注釈</p>		
<p>甘草は、粘膜などの炎症による痛みによく、桔梗は、鬱熱があつてそのために痛みを發するものによいので、桔梗湯の痛みは、甘草湯の痛みより少し深く強い。</p>		
<p>甘草湯は、肺痿の虚に用い、桔梗湯は、肺癰の実に用いるのである。</p>		